

2025. 5. 4 (日) ルカ 24 : 28 ~ 35

24:28 彼らは目的の村の近くに来たが、イエスはもっと先まで行きそうな様子であった。

24:29 彼らが、「一緒にお泊まりください。そろそろ夕刻になりますし、日もすでに傾いています」と言って強く勧めたので、イエスは彼らとともに泊まるため、中に入られた。

24:30 そして彼らと食卓に着くと、イエスはパンを取って神をほめたたえ、裂いて彼らに渡された。

24:31 すると彼らの目が開かれ、イエスだと分かったが、その姿は見えなくなった。

24:32 二人は話し合った。「道々お話しくださる間、私たちに聖書を説き明かしてくださいの間、私たちの心は内で燃えていたではないか。」

24:33 二人はただちに立ち上がり、エルサレムに戻った。すると、十一人とその仲間が集まって、

24:34 「本当に主はよみがえって、シモンに姿を現された」と話していた。

24:35 そこで二人も、道中で起こったことや、パンを裂かれたときにイエスだと分かった次第を話した。

<説教>

イエス・キリストは、私たちの罪をその身に負われて十字架で死なれ、そのからだは墓に葬られ、しかし三日目の週の初めの日の朝早くに、その葬られたからだをもって復活し、墓から出て行かれました。最初に墓に行き、御使いから告げ知らされた女の弟子たちはすぐに墓から戻り、使徒たちとその他の弟子たちに伝えました。しかし誰も彼女たちの言ったことを信じませんでした。その後、その日のうちに、その中の二人の弟子たちがエルサレムからエマオという村に向かって行きました。道すがら彼らは十字架につけられる前のイエスのこと、十字架につけられ死なれたイエスのこと、そしてイエスが復活なさったという女たちの話について話し合い、論じ合っていました。そんな彼らに、復活のイエスご自身が近づき、彼らとともに歩き始められました。しかし彼らの目はさきざきされていて、イエスだとは分かりませんでした。そんな彼らに対してイエスは「ああ、愚かな者たち。心が鈍くて、預言者たちの言ったことすべてを信じられない者たち。キリストは必ずそのような苦しみを受け、それから、その栄光に入るはずだったのではありませんか。」と言われ、そして、続けてモーセやすべての預言者たちから始めて、ご自分について聖書全体に書いてあることを彼らに説き明かされました。これが、先々週、先週に読んだ聖書の内容でした。

そのように、気付かずして復活のイエスと会い、イエスから直接イエスについて聖書全体に書いてあることの説き明かしを聞いた彼らでしたが、彼らの目的の村エマオが近づいて来ました。しかし、イエスはもっと先に行きそうな様子でした(28)。もちろんイエスご自身がこの後なさろうとしておられることを承知のうえで、そのように振る舞われたのです。後で振り返ると「心が内で燃えていた」彼ら(32)がイエスに「一緒にお泊まりください。そろそろ夕刻になりますし、日もすでに傾いています」と言って強く勧めました。イエスは彼の強い願いを聞き入れ、彼らの家に泊めてもらうお客さんとして彼らの家の中に入られました(29)。

しかし共に食事をするときになって、不思議なことが起こりました。イエスがパンを取って神をほめたたえ、裂いて彼らにお渡しになったのです(30)。食卓でパンを取り、神に祈りと賛美を捧げ、そのパンを裂いて人々に渡すことは、その家で一番権威のある人、つまり家の主人がすることでした。だからそのとき本来は多分クレオパがその務めを果たすつもりだったのではないかと思います。しかし先ほど無理に引き止めて家に泊まることにしてもらった見知らぬ客人が突然「権威ある主人」として振る舞われたのです。「神と自分たちの前で、行いにもことばにも力のある主人」(cf.19)として振る舞われたのです。クレオパたち二人が直接見聞きしていたかどうかは分かりませんが、イエスはかつて日が傾き始めたとき、五つのパンと二匹の魚で、男だけでおよそ五千人の人々を食べさせたことがありました。そのときもイエスは、パンと魚を取り、天を見上げ、神をほめたたえてそれを裂き、群衆に配るように弟子たちにお与えになったことをルカは記しています(9:12-17)。クレオパたちもそんなイエスの権威あるみことばとみわざについて、少なくとも聞いて知っていたでしょう。そしてイエスは「五千人の食事」のときでなくても、弟子たちと食卓についたときいつもそのようにしていたことでしょう。そのことはクレオパたちも実際に見聞きしていたことでしょう。このように、パンを取り、神に祈りと賛美を捧げ、パンを裂き、食卓にいる人々に分け与える、そういう「食卓の主人」としての権威あるみことばとみわざ。これはもう疑いようもなく、自分たちが見聞きしていたイエスのものだ。となれば、今この目の前の食卓におられるお方は死なれたけれども復活し、生きておられる主イエスである。そう彼らは認めたのです。〈すると彼らの目が開かれ、イエスだと分かった〉(31)次第はそういうことでした。〈目はさえぎられていて〉(16)、〈愚かな者たち。心が鈍くて、預言者たちの言ったことすべてを信じられない者たち〉(25)だった彼らの目を開き、イエスだと分かせたのは、やはりイエスのみことばとみわざの力によることでした。こうしてこのときイエスが彼らのうえに為そうとしておられたことがエマオの村でその通りになされました。エマオの村に向かう途中で二人に近づき、ともに歩み、ご自分について聖書全体に書いてあることを彼らに説き明かし、さらに食卓の主人としてみことばを聞かせ、みわざを示すことで、彼らの目を開き、ご自分が生きておられることを彼らに分らせる、イエスの復活を信じる信仰を起させるという目的をイエスは達せられました。それでイエスは姿を彼らから隠された(31)のでしょう。

二人はもはやエマオに向かう途中の二人ではありませんでした。二人の「話し合い」のことば(32)が変わりました。絶望から希望へと変わりました。意気消沈し、寒々しくなっていた彼らの心に暖かい火が灯されました。〈暗い顔〉(17)が「明るい顔」になったはず。また、その話し合いのことばには、自分たちが〈愚かな者たち。心が鈍くて、預言者たちの言ったことすべてを信じられない者たち〉(25)だったことについての反省と悔い改めがこもっているようにも思われます。それらのご自分の方から近づき、生きておられるご自身を現してくださったイエスのみことばとみわざによるのですが、イエスの御霊、即ち聖霊の働きによるとも言えるでしょう。それは愚かで、心鈍く、不信仰な彼らに対する神ののあわれみ、恵みによることでもありました。確かに〈聖書全体に書いてあること〉は、神の限りないあわれみ、恵みについて、即ちイエス・キリストについてなのです。

そしてイエスは二人からご自分の姿を見えなくすることで、彼ら自身が次になすべきことをお示しになったようにも見えます。それは彼ら自身がすぐにエルサレムに戻って使徒

たち、弟子たちのところに行くことでした(33)。そして〈道中で起こったことや、パンを裂かれたときにイエスだと分かった次第を話〉す(35)ことでした。彼らが戻ってみると、イエスの復活を信じなかった使徒たち、弟子たちの内に復活の信仰を起こさせようとのイエスのみわざはそこでも行われていました。彼らは「本当に主はよみがえって、シモンに姿を現された」と話していました(34)。

こうして、最初にイエスの墓に行った女性たち、そしてエマオに向かう途中でイエスから聖書の説き明かしを受け、イエスの食卓に与った二人の弟子たち、シモン・ペテロほかのエルサレムにいた使徒たち、弟子たち、イエスはそれぞれに、それぞれの仕方、本当にご自分が復活なさったことを明らかにして行かれました。こうして、復活を信じられなかった使徒たち、弟子たちのうちに信仰を起こして行かれました。また、彼らをお集めになり、信じられなかった者が信じるようにされた恵みを互いに語り合うことで、互いに励まし合うようにしてくださいました。私たちはそのような主イエスの恵みをすべて聖書のうちに読み、聖書から聞き、聖霊によって心燃やされて復活の主イエスを信じるのです。そして主が再び来られる日まで、主の聖晩餐に与り、主の死と復活を証し、宣べ伝えて行くのです。